

令和7年度事業評価シート(委員会まとめ)

【総務文教常任委員会】

事業名	「学ぶ楽しさ日本一」を目指した教育の実施に関する事業
委員会評価	<p>おおむね適正である</p> <p>本事業は「学ぶ楽しさ日本一」を目指し、多様な学びの機会を提供することを通じて、子どもたちの主体的な成長を支えることを目的としている。</p> <p>市民や現場のニーズ把握に一定の努力が見られる一方、その声の反映や双方向の対話がやや不十分であり、今後の改善の余地があると考える。また、各種事業の展開にあたり、地域性や対象によって取組の偏りが見られることも課題である。</p> <p>事業には独自の工夫や意欲的な取り組みも見られたが、費用対効果や成果の「見える化」、継続的な効果検証の仕組みについては、さらに明確にしていく必要がある。</p> <p>計画やビジョンとの整合性については、市の方向性との一致は一定程度確認されたものの、抽象的な表現が多く、市民への理解・共感を得るためには具体性のある説明が求められる。</p> <p>全体として、本事業は教育を軸にした地域づくりへの可能性を秘めており、今後は市民とともに学びをつくる姿勢と、成果の検証・改善を重ねる柔軟な運営を期待する。</p>
事業に係る提言	<p>改善し継続する</p> <p>本事業は「学ぶ楽しさ日本一」を掲げ、地域資源や多様な学びの機会を活かす点で意欲的な取り組みが進められている一方、いくつかの課題や改善の余地も見受けられる。</p> <p>まず、取り組みの成果をより客観的に可視化し、継続的に評価・検証する仕組みの構築が求められる。また、地域や学校間で事業の浸透度や熱量に差があることから、全体のバランスを意識した支援体制と横のつながりを強化する必要がある。さらに、教育現場の負担軽減と、地域住民や保護者の理解と協力を得るためにも、事業の意義や成果を「見える化」し、発信することが重要である。</p> <p>子どもたちの自己肯定感や探究心を育むための学びを継続的に展開していくには、単年度の施策にとどまらず、将来を見据えた中長期的な視点での計画と柔軟な改善が求められる。</p> <p>教育の質の向上と地域全体で支える教育環境づくりの両立に向けて、今後も実効性のある工夫と対話を重ねてもらいたい。</p>

令和7年度事業評価シート（委員会まとめ）

事業名 「学ぶ楽しさ日本一」を目指した教育の実施に関する事業

1.委員の評価を踏まえた委員会の項目別評価

評価内容	評価基準	委員会の評価	評価コメント
市民（市）のニーズを把握した事業となっているか	① なっている		<p>「学ぶ楽しさ日本一」を目指した本事業について、全体として、市民（子ども・保護者・教職員等）のニーズを十分に把握しているかについては、一定の取り組みは評価されつつも、更なる深化が求められていることが明らかである。たとえば「島のゆくりば」や「わんぱく塾」等は具体的な成果として評価されている。一方で、目指す学力像や「なりたい自分になる力」といった抽象的な表現が市民には伝わりにくく、アンケート結果だけでは実態把握として不十分との指摘もあった。また、市主導で始まった事業であり市民発のニーズではないとの見方や、継続的な意見交換の必要性も示されている。</p> <p>教育を通じて地域課題への対応や生涯学習への発展を期待する意見もあり、今後は市民の声を丁寧に拾い上げ、双方向の対話を通じてニーズに即した事業展開が求められる。</p> <p>本事業は、子どもたちの学びを支える多様な取り組みが評価される一方で、市民ニーズを的確に把握し、反映できているかについては、なお課題が残るとの意見が多くあった。特に、抽象的な目標設定や成果の見えにくさ、市民への説明不足が指摘され、現場や保護者の声をもっと丁寧に聞く必要があるとされた。また、既存事業の効果検証や、市民との継続的な対話を通じた改善が求められており、今後は地域課題にも対応できる柔軟な事業展開が期待される。</p>
	② どちらかといえばなっている	○	
	③ どちらかといえばなっていない		
	④ なっているとは言い難い		
事業の課題、問題点を認識できているか	① できている		<p>アフタースクールや地域事業の評価を「児童・保護者・教職員の声で洗い出すべき」との意見や、基礎学力と個性の発達が「学ぶ楽しさ」と直結するとの指摘、事業目的と成果を「見える化し、指標を設定すべき」との要望、また地域独自の伝統への視点、多様な子どもたちへの配慮と把握、目玉施策の一元化と理解の促進、多様化する教育的ニーズの認識、読解力向上への人的投資と、事業の課題や問題点について多角的な指摘があった。</p> <p>今、評価としては課題の把握と説明責任の重要性が共通しており、基礎学力の向上と個性の発達を両立させること、事業成果や課題の見える化、市民や現場への分かりやすい説明が不足している点が共通認識として挙げられた。特にアフタースクール事業や地域資源を活かした学びの充実、多様な子どもたちへの個別最適な学びの保障、さらには人的投資を含めた支援体制の強化が求められている。今後は一層の見える化、事業の理念を具体的に示し、市民と共有することが課題認識として重要であると考え。</p>
	② どちらかといえばできている		
	③ どちらかといえばできていない	○	
	④ できているとは言い難い		
事業に工夫（費用、効率・効果）は見られるか	① 見られる		<p>本事業については、多くの事業において独自の工夫や姿勢が見られる一方、費用対効果や効率性の検証体制が不十分との指摘が多く寄せられた。ICTの活用や地域資源連携、学童保育やアフタースクールなど評価される取組もある一方、基金の使途や関連性が不明瞭な事業も多く、明確な成果との結びつきが弱いとの意見もあった。「学ぶ楽しさ支援センター」は期待されているものの、現状の活用や全体像が見えにくい点が課題という意見もあった。</p> <p>以上のことから、今後は市民満足度調査などを通じて、実効性や公平性を検証し、予算配分に対する説明責任を果たす必要があると考える。</p> <p>本事業には、ICTの活用や地域との連携、アフタースクール事業など、工夫や独自性のある取り組みが見られる一方、事業全体としての費用対効果や効率性が十分に検証されているとは言い難く、課題が残る。特に、予算の使途が「学ぶ楽しさ」の目的と直結しているかわかりにくい部分があり、成果との関係性を明確に示す必要がある。また、拠点施設や各事業の取り組みに地域差があることや、人的体制の不足、進捗の見えにくさ等も指摘された。今後は、実施状況の可視化や市民の声を踏まえた検証を通じて、より効果的で持続可能な事業展開が求められる。</p>
	② どちらかといえば見られる	○	
	③ どちらかといえば見られない		
	④ 見られるとは言い難い		
計画、ビジョン、施策等に見合った事業となっているか	① なっている		<p>本評価については、地域間の温度差や支援員の確保といった現場の課題に対し、「取り組みに差がある」「現場の支援が不十分」といった指摘があった。また、「なりたい自分になる力」などのビジョンは評価される一方で、「やや抽象的で伝わりづらい」との意見や、学びの定義が曖昧で具体性に欠けるとの声も見られた。アンケートなどで市民の声を拾おうとする姿勢は見られるものの、「その結果をどう活かすかが問われている」との指摘もあり、市民発のニーズではなく行政主導の色が強いという声も上がっている。一方で、「地域づくりや生涯学習への展開に期待したい」との前向きな意見もあり、今後は地域と一体となった双方向の対話と、事業の目的・成果の明確化がより一層求められる。</p> <p>本評価は、教育振興基本計画との整合性を保ちながら、アフタースクール事業など一定の方向性が見られるとの評価があった。ただし、</p>
	② どちらかといえばなっている	○	
	③ どちらかといえばなっていない		
	④ なっているとは言い難い		

			地域間で取り組みに差がある点や、具体的な目標や成果指標の曖昧さに課題も指摘された。また、ビジョンが抽象的で「学ぶ楽しさ」とは何か、という根本的な問いに対する明確な共有が不十分との声も多く、支援員不足や多様性への対応など現場での実現性に不安を残す面もある。今後は、個々の子どもの主体的な学びをどう支えるかを軸に、ビジョンを具体化し、検証可能な形で施策に反映させていくことが求められる。
事業の成果	① 成果がある		<p>事業の成果としては、学ぶ楽しさ支援センターの設立やアフタースクールの展開、スポットクーラー整備や図書環境の充実など、一定の成果は見られるとの声があった。特に「子どもの内発性を育む取り組み」や、防災ジュニアリーダーの養成など独自性のある事業も評価されている。一方で、「成果が部分的な事例紹介にとどまり、全体像が把握できない」、「成功例が示されていない」、「スピード感が不足し、不登校や学力向上といった目標に対する進捗が見えづらい」といった課題も指摘されている。また、公民館講座や設備、アフタースクールの地域的な偏りについての指摘も複数見られ、今後は数値や定性的な評価を通じた成果の見える化と、地域間格差の是正が求められると考える。</p> <p>事業の成果としては、学ぶ環境の整備や地域と連携した学びの場の提供など、一定の成果が見られた。特に、子どもの主体性や多様な学びを支える取り組みは前進が見られたが、その成果が市全体としてどう広がっているのか、全体像が伝わりにくいという課題もある。地域間で事業の広がりや効果に差が見られることや、数値による効果測定の不足も指摘された。また、保護者や子どもたちの声をもっと丁寧に聞き取りながら、双方向の関係づくりを進めることが、今後の事業の質の向上につながると考えられる。市民とともに進化する教育の仕組みとして、より実感できる成果の「見える化」が今後の鍵となる。</p>
	② どちらかといえば成果がある	○	
	③ どちらかといえば成果がない		
	④ 成果があるとは言い難い		

2. 委員会評価

評価基準	委員会の評価	委員会の評価理由
良好である	○	<p>本事業は「学ぶ楽しさ日本一」を目指し、多様な学びの機会を提供することを通じて、子どもたちの主体的な成長を支えることを目的としている。市民や現場のニーズ把握に一定の努力が見られる一方、その声の反映や双方向の対話がやや不十分であり、今後の改善の余地があると考えられる。また、各種事業の展開にあたり、地域性や対象によって取組の偏りが見られることも課題である。</p> <p>事業には独自の工夫や意欲的な取り組みも見られたが、費用対効果や成果の「見える化」、継続的な効果検証の仕組みについては、さらに明確にしていく必要がある。計画やビジョンとの整合性については、市の方向性との一致は一定程度確認されたものの、抽象的な表現が多く、市民への理解・共感を得るためには具体性のある説明が求められる。</p> <p>全体として、本事業は教育を軸にした地域づくりへの可能性を秘めており、今後は市民とともに学びをつくる姿勢と、成果の検証・改善を重ねる柔軟な運営を期待する。</p>
おおむね適正である		
問題がある		
不適正である		

3. この事業に対する提案

提案基準	委員会の提案	提案、提言内容
拡充する	○	<p>本事業は「学ぶ楽しさ日本一」を掲げ、地域資源や多様な学びの機会を活かす点で意欲的な取り組みが進められている一方、いくつかの課題や改善の余地も見受けられる。</p> <p>まず、取り組みの成果をより客観的に可視化し、継続的に評価・検証する仕組みの構築が求められる。また、地域や学校間で事業の浸透度や熱量に差があることから、全体のバランスを意識した支援体制と横のつながりを強化する必要がある。さらに、教育現場の負担軽減と、地域住民や保護者の理解と協力を得るためにも、事業の意義や成果を「見える化」し、発信することが重要である。</p> <p>子どもたちの自己肯定感や探究心を育むための学びを継続的に展開していくには、単年度の施策にとどまらず、将来を見据えた中長期的な視点での計画と柔軟な改善が求められる。</p> <p>教育の質の向上と地域全体で支える教育環境づくりの両立に向けて、今後も実効性のある工夫と対話を重ねてもらいたい。</p>
改善し継続する		
現状のまま継続する		
縮小する		
廃止・休止する		